

[論文]

大学生は「やさしい日本語」講義を どう受けとめたか

オンデマンド型授業後の自由回答アンケート分析から

長谷川 頼子・井上 里鶴

How did university students perceive
the “Yasashii-nihongo” lecture?

— An analysis of a free answer questionnaire
after an on-demand class —

HASEGAWA Yoriko / INOUE Rizu

“Yasashii-nihongo” is a type of Japanese that is simpler than regular Japanese, making it easier to understand for foreigners who are not very good at Japanese. The purpose of this study is to clarify how university students perceived “Yasashii-nihongo” lectures in an on-demand class and to examine whether there were differences in how they perceived the lecture depending on its structure. For the on-demand class, we made two videos of 15-minute lectures each on “Yasashii-nihongo” (Video 1: Conceptual explanation [What is “Yasashii-nihongo”], Video 2: Explanation of linguistic rules [How to make “Yasashii-nihongo”]). The videos were distributed to 139 Japanese teacher training course students, and half of the students watched in the order of “Video 1 → Video 2” and the other half in the order of “Video 2 → Video 1.”

After completing the lecture, we administered a free-answer

questionnaire asking, “what did you learn through the lecture?” and obtained data for 108 students. After confirming that there was no difference in the number of views of each video, quantitative text analysis was performed using KH-Coder.

The analysis revealed that the students understood what “Yasashii-nihongo” is and how it is associated with their personal experiences. From the feature words extracted by KH-Coder and the co-occurrence network diagram created, it was found that the content of the answer about what was learned was strongly related to the content of the first video viewed out of the two videos.

1. 研究背景と目的

(1) やさしい日本語をめぐる社会的背景

「やさしい日本語」とは、普通の日本語よりも簡単で、外国人も伝わりやすい日本語のことである。難しい言葉を簡単な言葉に言い換える、一文を短くするなど、作り方のポイントがいくつかある。「やさしい日本語」という概念が注目されるようになったきっかけは、1995年の阪神・淡路大震災だと言われている。日本語も英語も十分に理解できなかった外国人の多くが、必要な情報を受け取ることができなかった。このことを教訓に、特に災害時などに、情報を迅速に正確に伝えるひとつの手段として、「やさしい日本語」が生まれた。

やさしい日本語をめぐるっては、その重要性への指摘（庵〔2020〕、岩田〔2016〕など）とともに、変換するための方法やツールの開発が進み、運用面での整備が進められている。現在、「やさしい日本語」は、災害時だけでなく、日本に住む外国人向けの行政情報や生活情報の発信、医療現場における対応など、多様な場で活用されている。さらに近年は、各省庁の取り組みも盛んである。2020年7月に閣議決定した「外国人材の受け入れ・共生のための総合的対応策（令和2年度改訂）」では、Ⅱ節の「3 生

活者としての外国人に対する支援」の項目に〈行政情報・生活情報の多言語・やさしい日本語化による情報提供・発信の推進〉が盛り込まれている。2020年8月には、出入国在留管理庁と文化庁が『在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン』を公表するなど、在留外国人への情報発信の手段としてやさしい日本語が活用されている。

(2) 本研究の目的

やさしい日本語への注目の高まりとともに、全国の自治体などでは、やさしい日本語に関する研修の実施や、やさしい日本語の普及に向けた動きも盛んである。大学生を対象としたやさしい日本語の講義を扱った研究には山崎（2020）があり、受講後の感想や意見を取り上げている。山崎（2020）によれば、やさしい日本語から日本人学生が母語である日本語について考えるきっかけを得たことや、他の人とのコミュニケーションの取り方について気づきがあったことが報告され、日本人学生と留学生が共に学ぶ大学環境においてやさしい日本語を使うことの意義を論じている。

このように、受講者の感想を求めるアンケートは、やさしい日本語の講義や研修の後にしばしば行われるものの、一方では、講義や研修の受け手がやさしい日本語をどのように受けとめているかについて、回答内容の入念な分析は質的にも量的にもなされていない現状がある。さらに、どういう構成でやさしい日本語の研修を行うのが良いかという観点からの考察も、今のところ見られない。

そこで本研究では、やさしい日本語の講義を受けた大学生から得た自由回答アンケートの結果をデータとして、計量テキスト分析の手法で、講義をどう受けとめたかを明らかにすること、講義の構成による受けとめ方の違いを検証すること、これら2点を目的とする。これらの結果から、次世代を担う若者へやさしい日本語をどう広めていくかを考えるための手がかりとする。

2. 研究方法

(1) やさしい日本語の説明動画の作成および配信

まず、やさしい日本語の説明動画を2つ作成した。1つ目の動画（以下、動画①）は、やさしい日本語の概念的説明が中心であり、社会的背景を踏まえたやさしい日本語の必要性を説明する内容である。2つ目の動画（以下、動画②）は、やさしい日本語の言語的規則の説明が中心であり、作り方のポイントを説明する内容である。いずれも約15分の動画を作成した。表1に、2つの動画でそれぞれ扱ったトピックやキーワードを示す。動画は各所でやさしい日本語研修を担当した実績がある者が作成した。

これらの動画を、2020年6月、大学国際学部副専攻日本語教員養成課程（4科目）の履修者139名に「やさしい日本語」特別講義（オンデマンド型）として配信した。視聴の順番と受けとめ方の関係を探索的に分析するため、対象者の半数（A）は「動画① → 動画②」の順に、もう一方（B）は「動画② → 動画①」の順に視聴するように設定し、動画公開日にURL情報を各学生にメール配信した。なお、学生には動画以外の資料などは配布していない。

表1 動画①および動画②のトピックとキーワード

動画①概念的説明	動画②言語的規則の説明
①やさしい日本語の定義、背景・必要性 ②活用例（自治体文書・医療現場・子どもや高齢者） ③英語より多くの外国人に伝わること ④外国人が直面する3つの壁（制度の壁・言葉の壁・心の壁） ⑤在留資格、多言語対応、日本語教育の機会の提供 ⑥多文化共生、外国人とのコミュニケーション	①やさしい日本語の定義 ②作り方の5つのポイント ・ゆっくり最後まではっきり話す ・一文を短く ・簡単な言葉を使う（漢語は和語に、具体例を挙げる、敬語は避ける） ・文末表現の統一（文体、指示や可能の表現） ・寄り添う心と笑顔で話す

(2) アンケートの実施・回収とデータ化

受講後、学生にアンケートを実施した⁽¹⁾。「やさしい日本語」講義を聞いて、あなたは何を学びましたか」との質問に、動画配信日から10日間、大学のwebシステムの自由回答テストに各自が入力した⁽²⁾。ネット環境により期間中に入力を完了できなかった一部の学生については、メール本文での提出、また手書き原稿の画像での提出を認めた。

動画配信日から10日目までの2つの動画の視聴回数を調べたところ、動画①が188、動画②が191とほぼ同数で、かつ履修者数を上回った。このことから、学生は受け取ったURL情報の順に動画を視聴した上で、アンケートに回答したものと仮定して分析を進める。なお、アンケート実施にあたっては、学内の教育倫理規定に従って調査の説明を確実にを行い、分析するデータには個人が特定される情報を含まないよう、十分に配慮した。

データは、期限内に入力し調査の同意を得た106名分を対象とする。内訳を表2に示す。各回答の平均文字数は222（最大381、最少41、標準偏差57.46）であった。データはExcelファイルで作成し、動画の視聴順、日本人・留学生、学年等の情報を付与した。回答本文の表記に対する事前処理としては、著しい日本語の間違いや、同文字の連続等の明らかな誤入力の修正、数字表記の統一にとどめた。

表2 データの内訳(カッコ内は調査対象数)

やさしい日本語の解説動画の視聴順	日本人	留学生	計
対象(A): 動画①概念的説明 ⇒ 動画②言語的ルール説明の順に視聴	35(46)	17(24)	52(70)
対象(B): 動画②言語的ルール説明 ⇒ 動画①概念的説明の順に視聴	39(45)	15(24)	54(69)
計	74(91)	32(48)	106(139)

(3) 調査対象となる学生と回答数

今回対象となった4科目は、いずれも副専攻日本語教員養成課程科目であるが、履修者全員が日本語教員養成課程の受講者というわけではない。特に、開講年次1年の科目は、カリキュラム上、学科の基礎的科目に位置付けられている。そのため、日本語教員養成課程科目であることを知らずに履修する1年生もいる。一方、4年生の一部には、すでに単位取得済みで、日本語教員養成を学んでいながらも今回の調査対象に入らなかった学生もいる。その意味で、日本語教員養成課程科目履修者と言っても、日本語教育を専門的に学んでいることが共通する背景だとは言えない。むしろ、英語や地域デザイン、国際ビジネス、観光マネジメントを学ぶ学生や、教職課程で学ぶ学生など、色々な背景を持った学生がやさしい日本語の講義を受け、アンケートに回答したと考えるべきだろう。

調査対象の139名は、あらかじめ表2の動画の視聴順で対象(A)と対象(B)に半数ずつ振り分け、その際、日本人、留学生の数も各対象で同じになるように設定した⁽³⁾。アンケートに回答した106名の内訳は、表2の通り、対象(A)が52名、対象(B)が54名で差はほとんどなかった。また、回答した日本人学生と留学生の数も、対象(A)と対象(B)で大きな違いはなかった。このことから、対象(A)と対象(B)におけるこれらの属性の面では考慮すべき大きな差はないものと判断して分析を進める。

(4) 分析ツールと分析方法

データの分析には、できるだけ主観を排して傾向を把握するために、計量テキスト分析のフリー・ソフトウェアであるKH Coder (version 3.beta.01e)を使用した。KH Coderは、アンケートの自由記述回答やインタビュー記録などのテキスト型データに含まれる、語の出現頻度や語彙の関連性を解析するテキストマイニングソフトで、社会調査のデータ分析を中心に用いられている。アンケートの自由回答から研修実施者や講師が内容を読み取ろうとする場合、読みたいところや、たまたま目にし

たところを読んでしまうなど、主観がしばしば入り込むことになる。しかし、計量テキスト分析の手法を用いることで、恣意性を排除し、自由回答の結果全体を客観的に把握することが可能となる。近年では、教育の場において授業の振り返りや感想、授業評価アンケートの分析にもこの手法が用いられている（安間〔2016〕、小林・中山・北・平工〔2016〕など）。本研究では、KH Coderによって以下の3つの分析を行った。

- ① 回答の全体的傾向を把握する手がかりとして、データ全体から頻出語を抽出する
- ② 講義の構成によって回答の傾向に違いがあるかを見るために、動画①と②の視聴順を外部変数として、対象(A)と対象(B)の回答の特徴語を抽出する
- ③ 対象(A)と対象(B)の回答の内容の傾向をつかむため、それぞれ特徴づける語が、回答の中でどう結びついて出現しているかを可視化する共起ネットワーク分析を行う

3. 結果と考察

(1) 全体的傾向

① 頻出語

データ全体から抽出した頻出語（150語）のうち、上位60語（出現回数14回以上）と各語の出現回数を表3に示す。なお、解析の前処理として複合語（「やさしい日本語」「外国人」「日本人」「日本語教育」「多文化共生」の5語）の強制抽出を行った。また、頻出語の抽出では、助詞・助動詞などの一般的な語を含む品詞は除外されている。

頻出語の上位3語の「やさしい日本語」（197回）、「外国人」（189回）、「日本語」（166回）は、すべての回答で言及されていた。また「講義」（40回）、「今回」（21回）や、「学ぶ」（64回）、「知る」（46回）、「感じる」（29回）、「考える」（18回）など、講義から自分が何かを得たことや反応したこと

に言及する語も多く見られた。

頻出語の多くは、表1に示した動画①と②のトピックやキーワード、また説明に使われた語でもあった。表1のトピックとキーワードで、頻出語（150語、出現回数5回以上）に入った語に下線をつけたものを表4に示す。別の文脈で使われた場合も考慮する必要があるが、トピックやキ

表3 データ全体の頻出語の出現状況(上位60語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
やさしい日本語	197	感じる	29	最後	17
外国人	189	大切	28	短い	17
日本語	166	コミュニケーション	27	統一	17
思う	120	ポイント	27	文末	17
話す	88	相手	25	3つ	16
使う	76	必要	25	言う	16
言葉	70	制度	23	受ける	16
日本	68	生活	23	授業	16
壁	66	多い	23	大事	16
学ぶ	64	今回	21	伝わる	16
分かる	61	伝える	21	勉強	16
人	59	笑顔	20	留学生	16
簡単	57	多く	20	寄り添う	15
理解	47	普通	20	気	15
知る	46	聞く	20	敬語	15
講義	40	5つ	19	在留	15
英語	39	国	19	重要	15
難しい	37	考える	18	災害	14
心	34	表現	18	自分	14
日本人	30	言語	17	優しい	14

表4 頻出語(150語)に含まれる動画①と②のトピックとキーワード(下線)

動画①概念的説明	動画②言語的規則の説明
①やさしい日本語の定義、背景・必要性	①やさしい日本語の定義
②活用例（自治体文書・医療現場・子どもや高齢者）	②作り方の5つのポイント
③英語より多くの外国人に伝わること	・ゆっくり最後まではっきり話す
④外国人が直面する3つの壁（制度の壁・言葉の壁・心の壁）	・一文を短く
⑤在留資格、多言語対応、日本語教育の機会の提供	・簡単な言葉を使う（漢語は和語に、具体例を挙げる、敬語は避ける）
⑥多文化共生、外国人とのコミュニケーション	・文末表現の統一（文体、指示や可能の表現）
	・寄り添う心と笑顔で話す

ワードの語句のほとんどが回答に現れていることが分かる。

以上の結果から、大学生は動画の視聴によってやさしい日本語の知識を学び、そしてそれについて考える機会を得ていたことがうかがわれる。

② 実際の回答例

回答の全体的傾向をつかむには、頻出語と出現回数という量的な面だけでなく、それが元の回答の文でどのように用いられたかを見ていく必要がある。KH Coder には、KWIC コンコーダンスという、特定の語を入力するとそれが使われている文脈を検索する機能があり、これによって回答の本文中での語の使われ方や、回答内容を直接確認することができる。

「知る」(46回)で検索し Excel ファイルに出力した結果の一部を図1に示す。

図1には、中央の検索語「知る」の前後の文脈が示されている。動詞「知る」の活用形「知った」「知って」「知らなかった」等も表示され、KH Coder 上ではさらに元の回答へジャンプすることもできるので、「知る」が用いられた前後の文脈をより正確に確かめられる。

頻出語を含む回答を、この機能で検索して内容を見たところ、いずれも講義内容に密接に関連しており、全体としてやさしい日本語への理解がされていたことが分かった。以下に例を示す。文中の下線は表3に含まれた頻出語を、「…」は中略を示す。

図1 KWIC コンコーダンス機能による頻出語
「知る」(46回)の前後の文脈(一部)

2	うな場所で外国人にもわかるような日本語を使っていることを知った。今まで意識していなかったけど、自分でも意識してみても
3	術的なことももちろんだが、笑顔で話だけでも変わることを知ったから実践していきたいと思う。◇やさしい日本語ということ
4	イント4つ目の文末表現を統一するということが大切であると知った時、なるほどなと感じました。日本人には高コンテキストの
5	かりやすいとかどういう話し方で話したら分かりやすいかを知っていきたくて思いました。これからもっと知りたいことなどが
6	で知りたいと思うことがあったら調べたり聞いたりしてもっと知っていったら良いと思いました。◇「やさしい日本語」について
7	も「やさしい日本語」で話した方が理解しやすいということを知った。相手に伝わりやすいようにかんたんで正確な日本語を話す
8	ける前には、「やさしい日本語」についておぼろげな意味は知っていましたが、具体的な用途や「やさしい日本語」が作られた
9	いう言葉が出来たきっかけが阪神淡路大震災というのは初めて知ったので驚いたし、もっと昔からあるのかと思った。確かに日本語
10	るので、よくわかりました。◇やさしい日本語がというものを知らなくて、今回の講義で初めて学べました。日本語に不慣れな外
11	い日本語」から勉強した基礎なことを復習したり、それにまだ知らないことを勉強していきます。やさしい日本語が日常生活の使
12	外国人に優しい日本語があることに驚きました。もしかしたら知らぬ間に使っているのかも知れないけれど、しっかりとこの「や
13	い。だからこそ、分かりやすい「やさしい日本語」の必要さを知らなくてはいけないと思う。さらに、幼児や高齢者と聞き、思い
14	やさしい日本語」ができたきっかけが阪神淡路大震災だったとは知らなかった。今年開催予定だったオリンピックの整備のために「
15	思が存在することと日本に住んでいる外国人に向け使うことは知らなかった。今回の講義動画を通して、やさしい日本語は科目や
16	ニュースが読めるものがあるのはこの授業を受けなければ私は知らないままだったと思います。やさしい日本語を使うときがきた

- (1) やさしい日本語は外国人だけではなく日本人の小さい子や高齢者にも使えるものだと思った。私は小学校の教師を目指しているので、低学年の授業や問題づくりに役立てることができると思った。…やさしい日本語は誰にでもわかりやすいものだと思った。

(2年・日本人学生・動画②⇒①の順に視聴)

- (2) 私は英語がとても苦手で、英語の授業でいつも先生に助けてもらう時、イラストや文など簡単な英語でヒントをもらい私自身が理解を出来るようになっていく。…やさしい日本語を使うにあたって、自分がその人の立場になったらと考えることが大切と学んだ。…アルバイト先に留学生がいるが、…講義で学んだ5つのポイントを押さえ、…今度のアルバイトの時にやさしい日本語を使ってみようと思う。

(2年・日本人学生・動画②⇒①の順に視聴)

- (3) 今回習ったやさしい日本語の中で紹介されていない言葉も自分で調べて学びたいと思うようになりました。…外国人等が日本を訪れた際、僕達の年齢層の人が1番貢献しなくてはならないのかと思います。

(1年・日本人学生・動画②⇒①の順に視聴)

(1)では、講義から何を学んだかという問いに対し、やさしい日本語をただ理解するだけでなく、子どもや高齢者へと活用範囲を広げて考えていた。(2)では、過去の自分の経験と結び付けたり、今後の自分の行動に活かそうとしていることが分かった。また、(3)は自分のような若い世代が、率先してやさしい日本語を理解し実践する必要性にも触れていた。

以下は、留学生の回答である。やさしい日本語への理解とともに、留学生の立場から日本人との交流や生活への適応に活用することへの気づきを得ていた。なお、回答には日本語の文法的な誤りが一部含まれるが、そのまま掲載する。

- (4) この授業を受ける前には「やさしい日本語」についておおざっぱな意味は知っていましたが、具体的な用途や「やさしい日本語」が作られた契機などは全然分かりませんでした。この授業を受けた後、日常生活の中で「やさしい日本語」がよく使われていても、自分が

気づかなかっただけだと分かりました。私のような外国人留学生にとって、「やさしい日本語」は私たちと日本人のより良い交流を促進できるだけでなく、日本での生活にも適応することができると思います。

(2年・留学生・動画①⇒②の順に視聴)

- (5) 「やさしい日本語」講義をとおして、私はやさしい日本語の意味と用途を学びました。外国人にも分かりやすい日本語は本当に助かります。そして、外国人の在留資格を学びました。留学をおいて、たくさんの在留資格があります。あとは言葉の壁で、多言語対応している。日本に生活する時、病院に行って、道を迷っていろいろなところがやさしい日本語を使って、すぐ理解できます。最後は普通の日本語をやさしい日本語に換えるポイントを学びました。

(1年・留学生・動画①⇒②の順に視聴)

- (6) 「やさしい日本語」講義を通して、「やさしい日本語」とはどういうものか、どうやって作れるか、理解できました。留学生として私も、来日後、色々なことが分かりませんでした。例えば、ゴミを分別する方法、自転車を使用するルール、地震が起こるとき、警報が鳴ったことがあるけど、どうすればいいのか、わかりませんでした。それは「言葉の壁」と「制度の壁」に関する問題だったと思います。日本語学校での先生方は、いつも簡単な言葉を使って、教えてもらったので、段々日本語能力が延ばすことができました。そういうわけで、私の意見も、外国人が日本に安心して生活をするため、「やさしい日本語」について深く理解できることが必要です。

(1年・留学生・動画②⇒①の順に視聴)

以上のように、全体的な回答の傾向としては、動画の視聴順に関わらず、それぞれの立場でやさしい日本語の講義内容を受けとめていたことが分かった。

(2) 講義の構成から見た受けとめ方の違い

① 回答を特徴づける語の抽出

次に、講義の構成（動画の視聴順）の別（対象(A)52名、対象(B)54名）に、各対象の回答を特徴づける語（特徴語）の抽出を行った。今回、アンケートの結果をデータ化した際には、個々の学生の回答が、動画の視聴順で分けた対象(A)と対象(B)のどちらであったかも情報として付与してある。そこで、KH Coderの「関連語検索」機能においてこの情報を外部変数として読み込むと、対象(A)に含まれる回答と、対象(B)に含まれる回答のそれぞれに高い確率で出現した語が、「回答を特徴づける語」として解析される。この「回答を特徴づける語」は、Jaccard 係数による測定の結果、数値が大きい順に選ばれた語であり、単に対象ごとに出現回数が多かった語ではない。Jaccard 係数とは、語と語の類似や共起の関連性の程度を表す指標で、KH Coderの「関連語検索」では初期設定で選択される。多くの研究で使われ、他の尺度より比較的数値が小さく出ることから、本研究でもJaccard 係数を用いた。どちらの対象にも同様に多く出現する語は、特徴語には入りにくく、対象(A)と対象(B)のどちらかに偏って現れた語が抽出される。これを、対象(A)と対象(B)の差異として捉える手がかりとする。数値は0～1の間で、1に近いほど関連が強く、0.3以上でとても強い関連があると解釈される。表5に結果を20語ずつ示す。

まず、対象(A)の回答には「外国人、日本語、日本、分かる、英語、高齢、子供、コミュニケーション」等の語が抽出された。表1に示した

表5 動画の視聴順に分けた回答を特徴づける語(20語)

対象(A)：動画①⇒動画②の回答の特徴語				対象(B)：動画②⇒動画①の回答の特徴語			
外国人	0.489	感じる	0.203	やさしい日本語	0.474	心	0.231
日本語	0.444	多い	0.190	言葉	0.421	ポイント	0.230
日本	0.371	普通	0.180	使う	0.397	統一	0.228
思う	0.361	多く	0.175	話す	0.377	日本人	0.209
人	0.318	高齢	0.173	講義	0.364	5つ	0.207
簡単	0.297	意味	0.167	学ぶ	0.356	大切	0.206
分かる	0.279	子供	0.167	理解	0.296	必要	0.200
知る	0.234	コミュニケーション	0.164	壁	0.254	一文	0.196
英語	0.226	気	0.161	短い	0.250	重要	0.193
授業	0.204	初めて	0.161	難しい	0.235	相手	0.193

分析対象となる総抽出語13,490、異なり語数1,246、文総数483。数値はJaccard 係数を表す。

動画①と動画②のトピックやキーワードと照らし合わせると、動画①で外国人の現状や、やさしい日本語の必要性の説明に用いた語が多く入っている。一方、対象(B)の回答には、「言葉、使う、短い、心、統一、ポイント、5つ」等の語が抽出された。表1と照らし合わせると、動画②でやさしい日本語の作り方の説明に用いた語が多いことが分かる。つまり、先に動画①を見た学生の回答には動画①の内容や説明で使われた語が、そして先に動画②を見た学生の回答には動画②の内容や説明で使われた語が、各対象の回答を特徴づける語として現れる結果となった。

これについて、さらに日本人学生の回答に限定した分析と、留学生だけの回答に限定した分析を行ったが、どちらの場合も全体と同様の傾向を示し、違いは見られなかった。

以上の分析から、大学生の回答は、その学生が最初に視聴した動画の内容や説明と関連していることが、回答を特徴づける語のレベルにおいて分かった。

② 共起ネットワーク分析の結果

前項①で抽出した特徴語が、さらに回答の中でどのような語と結びついて出現したかを可視化する共起ネットワークを、対象(A)、対象(B)の回答に対して図2、図3として作成した。図における丸の大きさは頻度を、線は語の共起関係を表す。検出する共起関係は上位60とし、「サブグラフ検出」という、語と語が比較的強く結びついている部分を自動的に抽出して色分けによるグルーピングを行うことで描画した。この色は、あくまで検出されたまとまりに付けることで視認性を高めるものであり、色の属性自体に、分析上の意味は何ら付与されない。本研究では色をグレースケールで表す。この語彙同士のつながりから、対象(A)、対象(B)の回答がそれぞれどのような内容であったかを読み取ることができる。

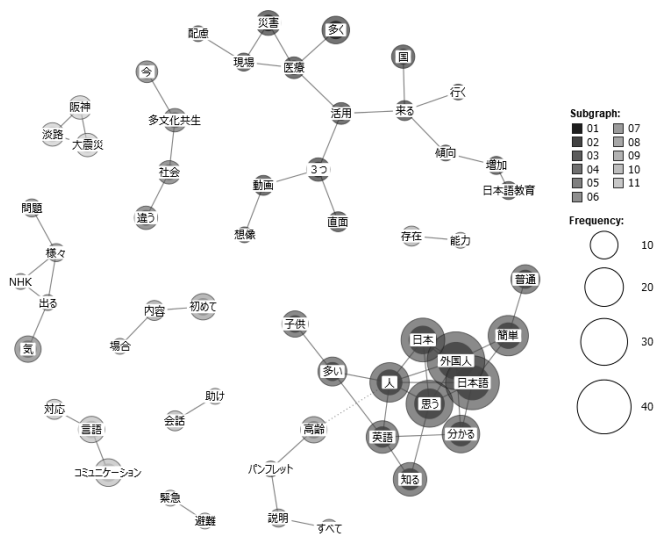
図2は、動画①概念的説明 ⇒ 動画②言語的データ説明の順に視聴した対象(A)の結果である。共起ネットワークを見ると、「外国人」「日本語」を中心とする一連のまとまりから、「普通より簡単な日本語」や「外国人に分かる日本語」という内容が読み取れる。これらは、動画①で説

明したやさしい日本語の定義にあてはまる。また「多く」「災害」「医療」につながる語のまとまりからは、「災害や医療現場で活用」との内容が読み取れるが、これも動画①で活用例として説明したものである。さらに、「阪神淡路大震災」「多文化共生」等も、動画①でやさしい日本語の背景・必要性やこれからの社会のあり方を説明した時に出てきた話題である。

このように、対象(A)の回答の内容を共起ネットワークから読み取った結果、学生が先に視聴した動画①で説明した概念的説明、すなわち、やさしい日本語の必要性や背景、活用例等に強く関連していることが分かった。

一方、動画②言語的ルール説明 ⇒ 動画①概念的説明の順に視聴した対象(B)の共起ネットワークを示した図3では、「話す」を中心に下へとつながる語のまとまりから、「やさしい日本語という言葉を使う」とことや「言葉を学ぶ」ことが内容として見出される。また、上へとつながる語の

図2 動画①概念的説明 ⇒ 動画②言語的ルールの順に
視聴した対象(A)の回答の共起ネットワーク

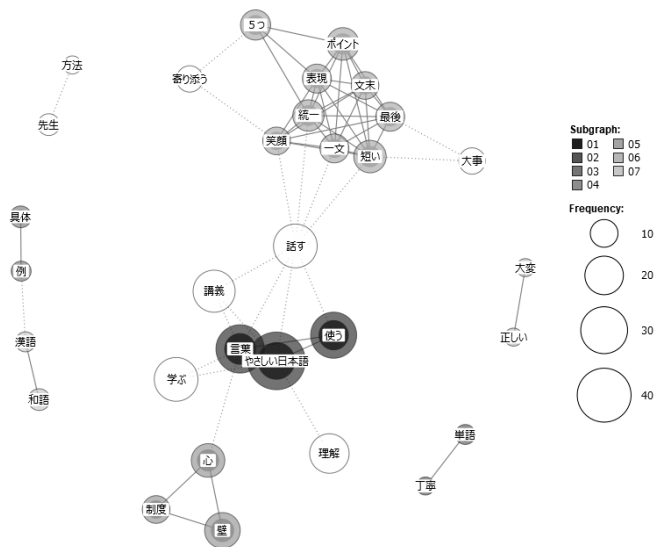


とまよりからは、やさしい日本語の作り方である「最後まで」「一文を短く」「文末表現を統一する」「寄り添う心と笑顔」などの内容が読み取れる。つまり、対象(B)の回答の内容は、最初に視聴した動画②の言語的ルールの説明に強く関連していることが分かる。

以上の図2と図3の共起ネットワークから、講義から何を学んだかという回答の内容面において、大学生が先に視聴した動画の内容と強く結びついていることが示された。

ただし、対象(B)の共起ネットワークで「言葉」から下へとつながって読み取れる「心の壁」や「制度の壁」は、後に視聴した動画①で「外国人が直面する3つの壁」として説明した内容にあてはまる。先に動画①を視聴した対象(A)の共起ネットワークでは、「壁」の語はないものの、「直面する3つ」が現れている。「壁」は、頻出語として9番目に多く使われており(66回)、「3つ」(16回)と「直面」(9回)も頻出語として抽出されている。やさしい日本語を理解する上で、「外国人が直面する3つの壁」

図3 動画②言語的ルール⇒動画①概念的説明の順に
視聴した対象(B)の回答の共起ネットワーク



というトピックが、多くの学生に強い印象を持って受けとめられたことを表したものと考えられる。

以上の分析から、やさしい日本語の講義を聞いた大学生のアンケート回答は、2つの動画のうち「最初に視聴した動画」の内容を色濃く反映し、結果として異なる受けとめ方になったことを確認した。大学生は、何か新しいことを学ぶ際、導入の段階で受けた内容を基になるものとして受けとめ、そこから全体への理解や自分の考えを深めていく傾向があることが示唆された。若い世代に、効果的なやさしい日本語の研修を行おうとする場合、担当講師はこうした点を踏まえて研修の構成について注意深く検討し、綿密に計画することが必要となる。

今回は大学生のみを対象としたが、構成の問題について、例えば年齢が上の対象者の場合どうなるかということを検証する必要がある。若い世代へのやさしい日本語の普及は、今後の日本社会にとって急務であり、本研究で得られた結果は、彼らへの普及を目的とした研修等の内容面・構成面を考える上で意味のある資料となるだろう。

4. オンライン授業を通じた教育の可能性

本研究は、大学生がやさしい日本語の講義をどう受けとめたかについてデータの分析と考察を行い、講義の構成が彼らの受けとめ方に影響を与える可能性についても指摘した。本研究の成果について、オンライン授業を通じた教育の可能性という視点で振り返る。

やさしい日本語の講義は当初、動画の作成者をゲストスピーカーとして招き、対面授業として行う予定であった。事前のゲストスピーカーとの打ち合わせでは、90分間の授業でやさしい日本語の導入と、実際にやさしい日本語を使う練習をグループで実施することになっていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大による影響で、オンデマンド型での開講となった。さらに、調査を行った2020年6月当時は、オンライン授業開始から1ヵ月半ほどの時期であり、動画作成、収録、配信に不慣れ

な点や、技術的な問題があり、動画1本あたりの収録時間は15分程度が限界であった。本来であれば90分間の講義内容を15分の動画2本にまとめたため、やさしい日本語の講義を受講した学生がどのように受けとめるかについて、予測不可能な部分が多かった。しかし、本研究で示した通り、オンデマンド講義であっても、実践に結び付くような気づきや学びを学生に促すことができた。

対面であってもオンラインであっても、学生が学んだことを社会に生かせる人材を育てるという教育の目的は変わらない。そのためには、社会の出来事を自分事として捉え、学んだことが社会につながるという意識を涵養する機会が必要である。今回のように限られた時間の中でのオンデマンド講義では特に、動画の中の話をどれだけ自分事として学生が受けとめるかが鍵となる。そのため、動画の作成においては、受け手である学生に身近な場面や話題の提示で導入し、自分の立場やこれまでの経験と結び付けた理解につながることを念頭に置いた。その結果、彼らは自分の文脈に合わせて自身が今後社会でできることを考える機会となっていた。オンデマンド講義であっても、学生の知と社会をつなぐ可能性は十分にあると言える。

また、上述の可能性を最大限に引き出すのは、オンデマンド型講義の与え手である教員の役割でもある。動画作成にあたり、講義の内容、構成、受け手へのメッセージ、彼らがどう受けとめるかについて、綿密な打ち合わせを重ねた。この時間は、我々にとってまさに、オンライン授業を通じた教育の可能性への挑戦であると同時に、貴重な学びの機会でもあった。学生の確かな学びは、オンライン授業を通じた教育の可能性を示唆しただけでなく、我々に学生と向き合うことの大切さを改めて気づかせてくれた。

オンライン授業を通じた教育の可能性は無限であり、今後も各所で取り入れられるだろう。一方で、対面であってもオンラインであっても、教育の目的や学生と向き合うことの大切さは変わらない。このことを忘れずに、オンライン授業を通じた教育の可能性について今後も追求して

いきたい。

〔付記〕 本論文の内容の一部は、日本語教育学会 2020 年度秋季大会（2020 年 11 月 29 日）においてポスター発表（発表題目『大学生は「やさしい日本語」講義をどう受けとめたか—受講後の自由回答アンケート分析から—』）を行った。

（注）

- （1） アンケートには他に 2 つの質問項目が掲載されている。これらの分析は稿を改めて行う。
- （2） 受講確認の必要から、入力を目安を 200 字程度と提示した。
- （3） 学年についても、あらかじめ 1～4 年生がほぼ同数になるように設定した。

（参考文献）

- [1] 青木誠一郎（2019）「天文学講演におけるアンケートの自由記述欄に対する計量テキスト分析」『情報教育シンポジウム論文集』2019 情報処理学会、pp. 277-282.
- [2] 安間文彦（2016）「授業評価アンケートの自由記述からの授業改善点分析」『e ラーニング研究』第 5 号 サイバー大学、pp. 7-22.
- [3] 庵功雄（編）（2020）『「やさしい日本語」表現事典』丸善出版
- [4] 岩田一成（2016）『読み手に伝わる公用文：〈やさしい日本語〉の視点から』大修館書店
- [5] 小林勝法・中山正剛・北徹朗・平工志穂（2016）「大学卒業生の教養体育授業に対する感想のテキストマイニング分析」『大学体育学』13.1、pp. 72-81.
- [6] 塚本未来・秋本秀人・金野智・山田秀樹（2019）「テキストマイニングを用いた児童の振り返りと教師のコメントの検討—体力づくりの取組に関する一考察—」『東海大学高等教育研究（北海道キャンパス）』20、pp. 41-49.
- [7] 樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析【第 2 版】内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版
- [8] 山崎恵（2020）『「やさしい日本語」再考』『姫路獨協大学国際言語文化論集』第 1 号、姫路獨協大学人間社会学群国際言語文化学類、pp. 61-73.
- ・「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」法務省出入国在留管理庁・文化庁 2020 (http://www.moj.go.jp/isa/support/portal/plainjapanese_guideline.html 法務省出入国在留管理庁ホームページ 2021 年 1 月 29 日最終アクセス)
- ・「外国人材の受入れ・共生のための総合的対応策（令和 2 年度改訂）」(http://www.moj.go.jp/isa/policies/coexistence/nyuukokukanri01_00140.html 法務省出入国在留管理庁ホームページ 2021 年 1 月 29 日最終アクセス)